

昨二月九日昼過ぎ、よく晴れているのに風の音が騒がしく、診察室の窓から隣家の竹藪がいつになく揺れているのが見えていたが、今朝の新聞によれば例年よりちよつと早いけれど、あれが今年の春一番だったという。そうか、それならばもう少し気持ちをこめて、空を走り過ぎる雲でも眺めておけばよかったと思う。春一番は大好きな日本語のひとつだが、例年、リアルタイムでしみじみとその言葉の放射する解放感に浸っている時間というのは殆どなくて、今年のように通り過ぎてからそれと知るばかりの、ちよつとばかり不思議な言葉である。

明けて快晴の二月十日は木曜日、休み。眩しく陽光の射し込む机の前に朝から座り込んでぼつぼつ書債を片付ける。大袈裟に書債というほどの頼まれ原稿がそんなにあるわけはなく、返事が書けなくて気になっている手紙が若干という程度、それと一応は眼を通さなくてはと決めている雑誌書籍文献なども、気持ちの上ではやはり重たい負債である。五時通信もまたそのひとつ。

明石の伊東容子さんから頂いた『海峡』という私家版の雑誌に載っていた梁勝則さんの「がんの時代を生き延びるために」という論文がひどく心に残る。

旧蟻二十五日、悪性度の高いスキルス型の胃癌に罹ったテレビ司会者逸見政孝氏が、無用無益の手術の後、もし手術なかりせばいままに亡くなつた。この悲劇的な出来事を筆者は日本の医療の歪みゆえ、遂に退院出来ないままに亡くなつた。この悲劇的な出来事を筆者は日本の医療の歪みのクローズアップされたものと見る。初回の手術をした前田病院は意外に進行していた逸見氏の癌に適切な治療をしたにもかかわらず、適切でない説明のために家族の不信を買ひ、東京女子医大のH教授はもっと不適切な説明をした上に、不適切どころか破壊的、犯罪的な二回目の手術を強行して患者から安らかな終焉を奪つた。

神戸の内科医で日本ホスピス・在宅ケア研究会事務局長の梁医師はずばりと書く。「医者はいとも簡単に人を殺せる、しかも感謝されながら」と。全く同感である。逸見氏とその夫人の談話によればH教授は初診時にこう言い放つたという。

「なぜこんなになるまで放つばといたんですか」と。

患者も家族も「放つばといた」わけでは決してあるまい。悩みぬき、迷いぬいた病人を鞭打つ、この答えようのない質問で教授はどんな答えを期待したのだろう。

実はこれは質問の態を借りた前医への陰湿な非難であり、同時に自らの優位な立場、権威をさらに補強して印象付けようという狡猾な策略でもあつた。つまり傲慢不遜なこの言葉が医者としての教授の限界、底の浅さを如実に表していると私は感じる。

自分の傲慢と狡猾を平気で開陳するこの教授が逸見氏に示した治療の選択肢はきわめて

狭いものであったであろうことは想像がつく。不幸なことにこのひとの視野には自分の専門である開腹手術しかなかった。不勉強というしかない。結果としてあたかも患者の側に立っているようなふりをしながらその実、自らの虚栄心を充たすためだけの、おためごかしの手術に走らざるを得なかったことになる。「私も頑張るからあなたも頑張りなさい」とはしらじらしい。これも激励のかたちを借りた感謝の強要でしかない。

癌再発の「告知」を受けた逸見氏が、もう一度開腹手術を受ける以外に癌と闘う方法が無いと思ひ込んでいるのならばそれは思い違いであつて、播種性腹膜転移にはその悲壮な決意は通用しないから再開腹手術は最も愚かな選択であると、H教授は誠意を持って説得すべきであつた。それが逸見氏の病態を知る医者としては唯一の途であつた。報じられた3キログラム余(?)の摘出物とはいつたい何か。それは俗臭芬々たる外科医の見栄と自己満足、大きな欺瞞の塊でしかない。逸見氏が生きて手術室を出られたのがむしろ不思議である。

週刊誌の広告に巨大な字で「教授の黄金の腕、難手術に成功」とあるのを見て私は仰天した覚えがある。ハナシがまるで逆ではないか。

梁医師はこの悲劇が逸見氏だけに起つた特殊な出来事ではなく日本のどこの病院でも、誰にでも起り得る普通の出来事だから、自衛策として「逸見氏と同じ目にあわないで済む方法」を皆で学ぼうと提案する。例えば

- (一) 本当の病名、状態について知っておく
- (二) 先生に総ておまかせしますはダメ
- (三) 示された治療法について根拠を求める
- (四) 別の方法についても訊く
- (五) 別の医師にも意見を聴く
- (六) 医師や医療に過度の期待をしない

などなど。医師にはまことに手厳しく、患者にはとても勇気のいる提言をしている。総て当たっている。

しかし、怖いことに自分の中にもH教授はいる。診察室で無意識のうちに患者に対して尊大になり、虚栄心を充たす為に、まるで自分の面子が一番大事なことに振舞うことがある。余程、心しなければ。

二階の窓を開ける。日没が近くなるにつれてますます大気が澄んで来て、雲ひとつないまま頭上の空は既に濃紺、思い付いて首を伸ばし朱に染まる西方を見れば鎌倉山の向うにくろくろと影富士。朝は純白の扇型であつたのに。